長崎大学で行われている研究の一端を、研究者が自らの言葉で語るコーナー。今後につながる研究の"芽"をご紹介します。

フィールドワークを旅人の視点に重ねてみる

みんなに"居場所"が開かれたグローバル社会を求めて

Text by Toshikazu Shuto

首藤明和 教授

長崎大学多文化社会学部教授。兵庫県西宮市生まれ。大阪大学人間科学部卒業。神戸大学大学院文化学研究科修了、博士（学術）（二〇〇一年）。兵庫教育大学准教授を経て二〇一四年より現職。専門は社会学。移動の観点からアジアにおける家族、村落、地域、市民社会、民族を研究。

世界各地の村を訪ね村人と共に考える

人が人を支配したり、人が自然を支配したりすることを当たり前と考えている今の社会は、早晩、行き詰まるでしょう。現代を生きるなかで私たちはさまざまな矛盾を感じています。しかしその一方で、この人生を生きる価値のあるものにするためには、やはり私たち自身の努力と、そのなかで蓄えてきた能力の解放が必要です。社会学を専攻し研究を志すようになった当初、阪神淡路大震災の震災復興調査で胸に刻み込んだこの思いは、今日、国内外のさまざまな地域でフィールドワークをおこなう際にも、私の学問的な好奇心の原動力となっています。生きとし生けるものすべてが"居場所"のある社会になるよう、新しい価値の創造に携わりたい。そのために求められているものは何だろうかと自問を続けています。

世界各地の村を訪れましたが、フィールドワーカーというよりはむしろ旅人としてというのが実感です。"われわれ"と"よそもの"の境界域をうろうろしながら、お年寄りや子どもの世話、今年の作物の収穫具合、若者たちの進路や結婚、亡くなった祖先のお墓のことなど、あれこれと首を突っ込んで聞いています。

フィールドワークは学問的な方法ですが、むしろ旅としての着眼からこそ新たな意味が見出せます。民俗学の柳田国男や宮本常一、乾武俊、人類学のC・ギアーツやJ・クリフォードなどは、「村を考える」のではなく「村で考える」ことの大切さを教えています。研究者の世界観によってフィールドで見聞した出来事を整序づけ描写するのではなく、むしろ旅人は立ち寄ってそこに居る人たちと一緒に悩み考える。一方、そこに居住する人たちは自分たちの生活や文化を解釈し旅人に翻訳することを通して、彼ら彼女たち自身、世代間、世代内で転地を繰り返しながらさまざまな見方、感じ方を培ってきた旅人であることに気づきます。本質的に語られる起源（Roots）よりも、今日あるいは未来へと向かうなかで変化してきたこと、すなわち起源よりも経過（Routes）のほうがよっぽど自分たちの生活や文化を語る語り方としてはふさわしいのです。そこには、"われわれ"と"よそもの"を画然と分ける境界が本質的に存在するのではなく、むしろそういった境界がいつどこでどのような方法で引かれたのかを問いかける自省のチャンスが横たわっています。

私は中国で回族、チベット族、土族、モンゴル族、ナシ族、モソ族など「少数民族」の村々をいくつか訪ねました。国家が民族として識別した五十六民族のうち少数民族人口は約一億人です。民族区域自治が実施されている地域は国土の六十九%、しかも総国境線二・一万kmのうち一・九万kmを占めます。国防上の要衝であり豊富な天然資源もあります。国土の辺境にありながら国防と開発のために中央の権力と資本が集中的に投下され、中心と辺境をめぐる時空間の圧縮と輻輳が歴史的に繰り返されてきました。ここでの旅人は、そこに未開の地を発見するのではなく、むしろ権力と資本の翻弄に抗う人びとの姿、境界侵犯と異種混淆を常としながら、ときには逆説的に共生の作法を編み出す地平などを見出すのです。

少数民族、回族にみられる共生の作法

一例を挙げましょう。ミャンマー国境沿い、雲南省保山市の回族です。その祖先は、唐や元の時代、アラビアやペルシア、中央アジアなどから移り住んできたイスラーム教徒です。その後、中国を生きるなかで故郷と母語を喪失しましたが、その信仰は受け継いできました。保山は明清四大イスラーム漢文訳著家のひとり、馬注（一六四〇～一七一一）の所縁の地です。現在、馬注にまつわる記憶や墓、故郷などの「発見」や馬注思想の発揚を通じて、保山回族は漢族との共生を図るなかでまちづくりをおこなっています。馬注は、イスラームの一神論と儒学の関係を漢語で注釈し、両者の社会上の作用を同一と見なしました。さらに、宗教とは時と場所に応じて旧来の制度、慣習、方法を自ら革新するものだとして、宗教の変化の内容と方向を思索しました。その結果、「聖俗並存的信仰体系」という「二元忠貞」、現在でいう「愛国愛教」の二重的信仰体系の礎ともいうべき思想を築いたのです。この馬注もまた旅人でした。一六四〇年に保山で生まれ十六歳で科挙受験有資格者（秀才）、十八歳には明朝亡命政権である南明の官吏につきました。三十歳のときに北京に向かい十数年滞在した頃から主著『清真指南』の執筆を始め、その後、山東、江蘇、浙江、安徽、西安などを歴訪して有識者の教えを乞いながら推敲、校訂を重ね、一六八七年、故郷の保山に戻ったとされます。

アヘン戦争、太平天国の乱から清末期にかけて、雲南の漢族とムスリムは土地や鉱山の所有権、地域の支配権をめぐって紛争が絶えませんでした。雲南のムスリム人口は十分の一に激減したといいます。また新中国建国後も反右派闘争、大躍進、文化大革命のなかで回族の信仰や習慣は激しく揺さぶられました。幾重にも積み重ねられた凄惨な歴史を、雲南の回族は特定の人物や地域、出来事と結びつけて記憶しています。したがって今日、保山の回族による共生の作法の実践とは、ネガティブな記憶や歴史から反転してポジティブな未来（歴史）を紡ぎ出そうとする逆説的な営みとして理解できるのです。その拠り所は旅人としての馬注の思想です。

写真の子どもたちは、保山の村のモスクでアラビア語を学び、将来、エジプトやサウジアラビア、マレーシアなどイスラーム圏の大学に留学することを夢見ています。夏休みや冬休みになると、雲南の大学に通う回族の大学生がボランティアで村のモスクに泊まり込み、子どもたちにアラビア語を教えたりします。

旅をライフの常態と見る視点を通じて、現在のグローバル世界をみんなに"居場所"の開かれた社会へと開いていく条件を探求する……、私自身まだまだ旅が続きますし、長崎大学で学ぶ学生たちはさらに豊かな旅を続けてくれることでしょう。旅は道連れ世は情け、時に立ち止まり悩みつつも、みんなで旅を続けていきたいものです。

フィールド調査をした地域

部分が実際に私がフィールド調査を実施した地域。国土上の辺境は、むしろ地政学的な重要性から、人、モノ、情報の複雑な移動を生み出しています。越境・境界侵犯・異種混淆などが起こり、価値の創造において最もダイナミックな現場です。

雲南省保山市の村のモスクにて